

# 保育者が感じている問題とカウンセリングニーズ

井上 清子\*・石川 洋子\*\*・会沢 信彦\*\*\*

## Problems and Counseling needs Nursery Teachers Have

Kiyoko Inoue, Hiroko Ishikawa, Nobuhiko Aizawa

### I はじめに

平成11年に、保育所保育指針の内容が変更され、保育士が保護者との積極的な関係づくりや保育所における地域子育て支援を行うことが盛り込まれた。平成13年には、児童福祉法の改正が行われ、保育士は国家資格として位置づけられ、乳幼児の保育とともに保護者への指導を行うこととされた。平成14年度から「家族援助論」が必修科目として新設されるなど、保育士養成カリキュラムも変わってきている。若林<sup>1)</sup>の研究によると、関東地域の保育士養成校34校中25校(71%)がカウンセリングの授業を取り入れており、31校(91%)が必要であると回答していた。

一方、幼稚園教育要綱(平成10年改訂)にも幼稚園における子育て相談を行うことなどが明記されている。さらに中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」(平成17年)でも、具体的施策の中で、子育て支援の推進や幼稚園等施設における地域の人材活用として保育カウンセラーの例があげられている。幼稚園教諭免許取得のためには、カウンセリングを含んだ教育相談等が必修科目として設定されている。

子育て支援の現場における問題についての先行研究では、上田<sup>2)</sup>の公立幼稚園・公立保育園に勤務する保育者を対象とした調査で、保護者との連携の力量が重視されているとともに生活習慣の形成との関連で特にその困難さを感じていることや、一人一人の子どもの個人差に応じた保育をする力量の重視と困難さなどが指摘されている。

橋本<sup>3)</sup>は地域子育てセンターと保育所の職員を対象とした調査で、面接相談・電話相談などの相談業務の実施にあたっては、保育士の知識と経験「プラス新しい知識や経験が必要」と感じていること、必要と思われる研修として「カウンセリングの技術」が高い割合であげられていることなどを報告している。

\* いのうえきよこ 文教大学教育学部

\*\* いしかわひろこ 文教大学教育学部

\*\*\* あいざわのぶひこ 文教大学教育学部

しかし、保育者のカウンセリング研修の現状やニーズ、研修の具体的内容についての研究はまだ充分とは言えない。これらの背景をもとに、今回筆者らは、保育所や幼稚園に勤務する保育者を対象として、保育者が感じている保育現場における問題とカウンセリングの研修のニーズを中心に調査・研究を行ったので報告する。

## Ⅱ 研究の方法

### 1. 調査対象と方法

文教大学生涯学習センターと日本教育カウンセラー協会共催の「子育て支援カウンセリング講座」の参加者のうち、保育所または幼稚園に勤務している者92名。講座開催中に質問紙を配布し、回収した。

なお、統計的処理には、統計解析パッケージSPSS for Windows 15.0Jを使用した。

### 2. 調査時期

2005年3月、8月

### 3. 調査内容

- (1) 回答者の属性：年齢、性別、勤務年数、勤務先、役職、勤務地
- (2) 子どもと関わる中で感じる問題や困難（自由記述）
- (3) 保護者と関わる中で感じる問題や困難（自由記述）
- (4) 困難を感じた時、主に相談する相手
- (5) カウンセリングに対する関心の度合い
- (6) 仕事上でカウンセリングを学ぶ必要性を感じる度合い
- (7) カウンセリングを学ぶ必要性を感じる場面（自由記述）
- (8) カウンセリングの研修会への参加経験
- (9) カウンセリングの研修会に参加しづらい理由
- (10) カウンセリングについて学びたいこと
- (11) カウンセリング研修会の日程の希望
- (12) 自由記述欄

## Ⅲ 結果と考察

### 1. 対象者の属性

調査対象者92名（男性2名、女性90名）の年齢は、25～69歳で、50歳代、40歳代が多かった。平均年齢は42.8歳（標準偏差10.0）であった。勤務年数は1～38年で、20～29年の者が多かった。平均勤務年数は19.2年（標準偏差10.5）で、長年保育に携わっている者が多い。勤務先は、私立保育所が21名（22.8%）、公立保育所が36名（39.1%）、私立幼稚園が29名（31.5%）、公立幼稚園が6名（6.5%）であった。公立幼稚園勤務者が少ないが、対象者のうち83名（90.2%）の勤務地が埼玉県であり、公立幼稚園自体が少ないためでないかと推測された。

## 2. 子どもと関わる中で感じる問題や困難

保育者が子どもと関わる中で困難を感じている問題についての自由記述の結果をまとめたものが、表1である。

「子どもの情緒や行動上の問題」が53件と最も多かった。具体的には、「集団行動や集団生活に慣れない」「話を聞けない」「叩く・噛みつくなどの暴力・暴行」などが特に多く、「わがまま」「落ち着きがない」「暴言」「他人と関われない」「大人の顔色をみる」「運動や体験をできない・嫌がる」なども複数の回答があり、それらを親子関係や家庭での躾の問題と関連してとらえている保育者も少なくなかった。

次いで「基本的生活習慣やしつけの問題」に分類されるものが22件あり、具体的には「夜型の生活や睡眠時間・生活リズムの問題」が最も多かった。「食生活の乱れ」「しつけの問題」「生活習慣の違いや乱れ」も複数回答があった。

「発達障害などの問題」も16件あり、障害児への対応のみならず障害が疑われるグレーゾーンの子どもの対応に苦慮している記述がみられ、専門的な知識や対応が要求されている様子がうかがわれた。

「家庭や親子の問題」は6件で、そのうち5件は「親の不適切な対応（過剰な期待や愛情不足）」であった。

「その他」に分類された項目では、複数担任の問題や、子どもの背負っている問題の大きさ多さ、充分に対応できない不全感などが記述されていた

## 3. 保護者と関わる中で感じる問題や困難

保育者が保護者と関わる中で困難を感じている問題についての自由記述の結果をまとめたものが、表2である。

「保護者と保育者の関係」に分類されたものが39件と最も多かった。具体的には、「不満・苦情が多い」「意見や様子を伝えるのが難しい」などの他「連携・連絡が難しい」「信頼関係を築くのが難しい」「保育者の意見や話を

表1 子どもと関わる中で感じる困難や問題

問 題	件数
<b>情緒や行動上の問題</b>	53
集団行動や集団生活に慣れない	8
話を聞けない	8
叩く噛みつくなどの暴力・暴行	7
わがまま	4
落ち着きがない	4
暴言	3
他人と関われない	3
大人の顔色をみる	3
運動や体験を嫌がる・できない	3
精神面・情緒面で幼い	2
楽しめない・つまらなそう	2
目が合わない・無表情	2
子どもらしくない	1
円形脱毛などの心身の症状	1
いじめ	1
話せない	1
<b>基本的生活習慣やしつけの問題</b>	22
夜型の生活や睡眠時間・生活リズムの問題	8
食生活の問題	4
しつけの問題	4
生活習慣の違いや乱れ	4
生活体験の不足	2
<b>発達障害などの問題</b>	16
障害児への対応	8
障害が疑われる子どもへの対応	5
障害児を含むクラス・集団への対応	3
<b>家庭や親子関係の問題</b>	6
親の不適切な対応	5
家庭の問題	1
<b>その他</b>	15

きかない」「考え方・価値観の差」「コミュニケーションを取りづらい」など、保育者と保護者とのコミュニケーションや関係作りに困難を感じており、従来の報告・指導・助言型のコミュニケーションだけでは上手くいかない様子がうかがわれた。

次いで「子育てやしつけの問題」に分類されたものが25件と多く、「親の生活のペースを崩さず子どもを犠牲にしている」「生活習慣の形成やしつけなど子育てができていない」「子育てやしつけの方針を曲げない」などのために日常の園での保育にも支障をきたしている様子が並記されているものも多かった。

「保護者自身の病気や悩み」は15件あげられていた。「精神疾患」や「家庭や夫婦の悩み」を保護者自身が抱えており、どこまでどう対応して良いか難しさを感じているようであった。

「子どもとの関係」に分類されるものも15件あり、「子どもに対する不適切な態度（過保護～無関心）」「親子関係の問題」「ネグレクト・育児放棄・子どもを愛せない」などが具体的にあげられていた。

「保護者の意識や性格上の問題」も13件あり、「親としての意識が薄い」「権利意識が強い」「社会性やモラルがない」などであった。

「子どもの障害」が11件、「その他」が6件あった。

表2 保護者と関わる中で感じる困難や問題

問 題	件数
<b>保護者と保育者の関係の問題</b>	39
不満・苦情が多い	8
意見や様子を伝えるのが難しい	7
連携・連絡が難しい	4
信頼関係を築くのが難しい	4
保育者の意見や話を聞かない	3
考え方・価値観の差	3
コミュニケーションを取りづらい	3
トラブルを伝えるのが難しい	2
話す時間がとれない	3
子どもの病気を隠す	1
担任も話をするのを逃がっている	1
<b>子育てやしつけの問題</b>	25
親の生活のペースを崩さず子どもを犠牲にしている	8
生活習慣の形成やしつけなど子育てができていない	6
子育てやしつけの方針を曲げない	3
子どもに目がむけられていない	2
自分の子育てに問題を感じない	2
怪我に対して過敏	1
親と保育者の間で差が大きい	1
初めての子育てでの混乱	1
親が子育てをする意識が低い	1
<b>保護者自身の病気や悩みの問題</b>	15
精神疾患	6
保護者が悩みを抱えている	4
夫婦の問題で悩みを抱えている	3
若い親や母子家庭	2
<b>子どもとの関係の問題</b>	15
子どもに対する不適切な態度（過保護～無関心）	6
親子関係の問題	3
ネグレクト・育児放棄・子どもを愛せない	3
子どもへの暴力	1
親自身のことで手いっぱい	1
子どもの私物化	1
<b>保護者の意識や性格的な問題</b>	13
親としての意識が薄い	3
権利意識が強い	3
社会性やモラルがない	2
攻撃的	1
理屈が多い	1
人間関係ができない	1
自己中心的・我慢ができない	1
適度に意見をいえない	1
<b>子どもの障害の問題</b>	11
障害が疑われる子どもの保護者対応	7
障害児の保護者対応	3
障害児がいるクラスの保護者対応	1
<b>その他</b>	6

#### 4. 困難を感じた時、主に相談する相手

上記のような問題を感じた時に主に相談する相手について集計したものが、図1である。「同僚」「上司」への相談が多く、職場内で相談しあい解決の糸口を探そうとしている者が多いことが推測された。しかし、それに次いで「外部の専門家」への相談が多く、保育者間だけでは解決できないような専門的な知識や技術が必要とする場面が増えているためかもしれないとも考えられた。菅野<sup>4)</sup>や藤後<sup>5)</sup>が報告しているように幼稚園や保育園へのカウンセラー導入も今後増えていくのかもしれない。

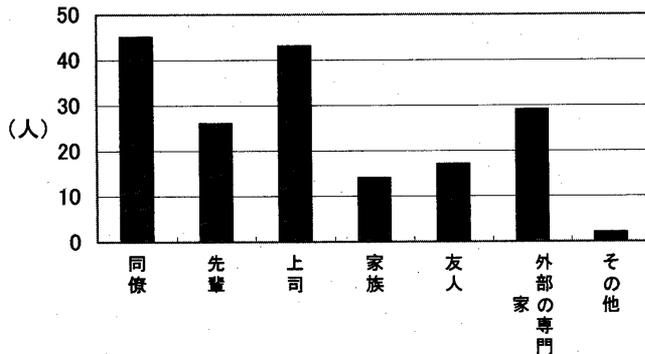


図1 相談相手

#### 5. カウンセリングに対する関心と必要性

対象者のカウンセリングに対する関心を5段階評定で回答を求めた結果を示したものが、図2である。

「とてもある」が76名(82.6%)、「少しある」が16名(17.4%)であった。「どちらともいえない」「あまりない」「全くない」と答えたものはいなかった。

さらに、仕事をしていく上で、カウンセリングを学ぶ必要性を感じる必要があるかを、同様に

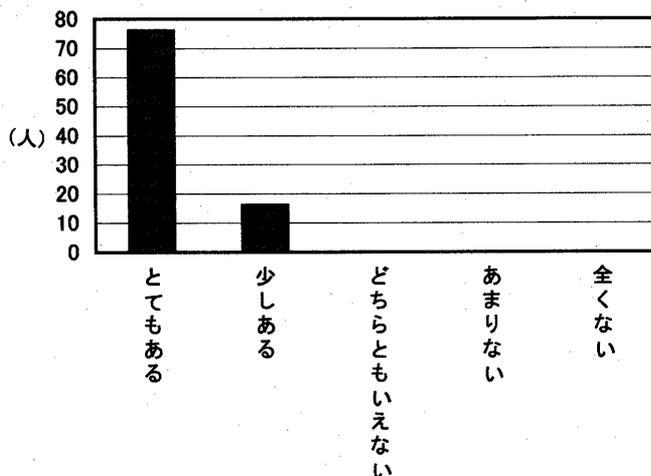


図2 カウンセリングに対する関心

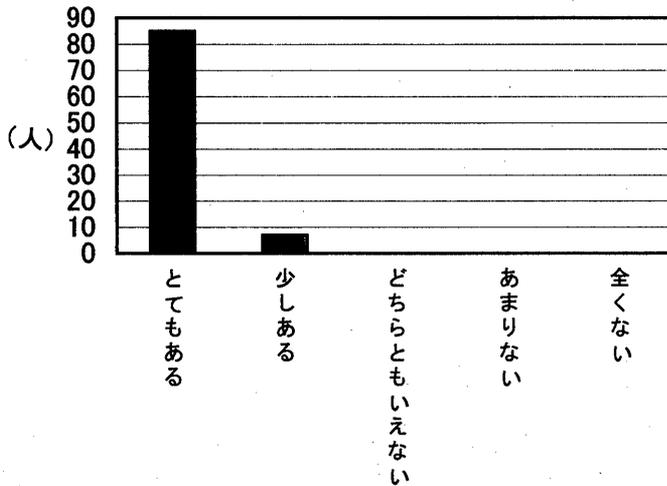


図3 カウンセリングを学ぶ必要性

5段階評定で回答を求めた結果を示したものが、図3である。

「とてもある」が85名（92.4%）で、関心を持っているものよりさらに多かった。「少しある」が7名（7.6%）、「どちらともいえない」「あまりない」「全くない」と答えたものはいなかった。

今回の調査対象が「子育て支援カウンセリング講座」に参加した保育者であるため、カウンセリングに対する関心や必要性が高いのは当然かもしれないが、多くの参加者が保育現場での必要に駆られ講座に参加している現状が推測された。

## 6. カウンセリングの必要性を感じる場面

カウンセリングを学ぶ必要性を感じる場面の自由記述の結果をまとめたものが、表3である。

一番多いのは、「日常での保護者との関わり」場面で65件があげられていた。具体的には、日常の「保護者対応・保護者面談」が36件と一番多く、次いで「保護者から相談をうけた時」が12件であった。橋本ら<sup>3)</sup>の調査で、面接相談・電話相談などの相談業務の実施にあたって必要と思われる研修として「カウンセリングの技術」が高い割合であげられていることなどを報告しているが、日常での保護者対応や面談でもカウンセリングの技術が必要と感じている保育者が多いようである。

次いで多かったのは「特別な保護者との関わり」場面で26件であった。「重い相談や悩みを抱えている保護者の対応」「母子関係や子育てに問題がある時」「精神疾患を抱える保護者への対応」「障害児の保護者対応」などが複数の保育者からあげられていた。

その他の場面としては「保育者間のかかわり」が11件、「自己啓発・自己研鑽」が10件、「日常での子どもの関わり」が7件、「特別な子どもとの関わり」が3件で、圧倒的に保護者との関わり場面でカウンセリングを学ぶ必要性を感じていることが多いことがわかった。

## 7. カウンセリングの研修

カウンセリングの研修会への参加経験の有無をきいたところ、経験あり44名（47.8%）、経験なし46名（50.0%）、不明2名（2.2%）であった。保育経験が比較的長く実際に講座に参加した

表3 カウンセリングの必要性を感じる場面

問 題	件数
日常での保護者との関わり	65
保護者対応・面談	36
相談を受けたとき	12
相手の思いを聴き助けになりたい	5
考え・価値観の違う保護者への対応	4
地域の子育て支援	3
コミュニケーションの促進	2
短時間での対応	2
電話相談	1
特別な保護者との関わり	26
重い相談・悩みを抱えている保護者の対応	11
母子関係や子育てに問題がある時	5
精神疾患を抱える保護者の対応	4
障害児の保護者対応	4
問題のある子どもの保護者の対応	1
苦情を訴えられた時	1
保育者間の関わり	11
保育者同士の関わり・人間関係	5
若い職員を育てる・助ける	3
職員の心理的サポート	3
自己啓発・自己研鑽	10
日常での子どもとの関わり	7
特別な子どもとの関わり	3
問題行動のある子と関わる時	3

者を対象とした今回の調査でも、半数以上は初めてのカウンセリングの研修の機会であることがわかった。保育所に就職して2年目と6年目の保育士に対して保育研修への参加を調査した水谷ら<sup>6)</sup>の研究では、80%以上が研修への参加経験があり、年4回以上参加している者も40～59%と報告されており、本調査の結果とはギャップがあった。このことから、各自治体等が実施している保育研修では、カウンセリングの研修はあまり行われていないことが推測された。

## 8. カウンセリングの中で学びたい内容

カウンセリングに必要な知識や技術12項目を選択肢としてあげ、複数回答可で選択してもらった結果が図4である。

一番多かったのは「カウンセリングの基本的技法（聴き方、話し方）」で64人（71.1%）が選択していた。次いで「保護者（親）の心理と対応」を49人（54.4%）が選択しており、ここでも保育者が保護者理解とその対応に苦慮している様子がうかがわれた。「カウンセラーの基本的態度（心構え）」も45人（50.0%）が選択していた。保育の現場においても従来の指導的対応ではなく、カウンセリング的な態度や聴き方・話し方の必要性を感じ学びたいと思っている保育者が多いと思われた。

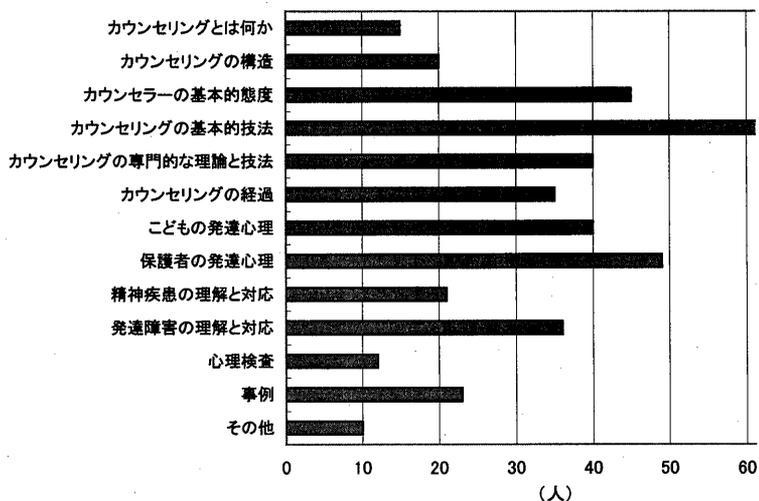


図4 カウンセリングについて学びたいこと

#### IV まとめ

文教大学生涯学習センターと日本教育カウンセラー協会共催の「子育て支援カウンセリング講座」の受講者のうち、保育所または幼稚園に勤務している者92名を対象として、保育現場で感じている問題とカウンセリング研修に対するニーズについて質問紙による調査を行い検討した。

子どもと関わる中で感じる問題としては、「子どもの情緒や行動上の問題」「基本的生活習慣やしつけの問題」を感じている者が多かった。それらを親子関係や家庭での躰の問題と関連してとらえている保育者も少なくなく、保護者と関わる中で感じる問題としては、「保護者と保育者の関係」「子育てやしつけの問題」「保護者自身の病気や悩み」「保護者の意識や性格上の問題」をあげた者が多かった。

さらに、仕事をしていく上で、カウンセリングを学ぶ必要性を感じるかどうかという設問に対しては、全員が「とてもある」「少しある」を選択しており、高いニーズがあることが確認された。

必要性を感じる場面としては、「日常での保護者との関わり」「特別な保護者との関わり」と保護者対応の場面が圧倒的に多かった。

しかし、過去にカウンセリングの研修を受けたことのある者は半数に満たなかった。今後保育者を対象としたカウンセリングの研修の機会が持たれることにより、保育者の多様化する保護者対応や子育て支援の一助になると考えられた。

今後は、本研究の結果を踏まえて、講座参加者以外の保育者にも対象を広げて検討していきたい。

#### 引用文献

- 1) 若林明美：養成校におけるカウンセリングの授業についての実態調査、日本保育学会大会発表論文抄

録、620-621、2001

- 2) 上田淑子：保育者の力量観の研究—幼稚園と保育所の保育者の比較検討から、保育学研究41(2)、24-31、2003
- 3) 橋本真紀他：保育所併設型地域子育て支援センターの現状と課題、保育学研究43(1)、76-89、2005
- 4) 菅野信夫：子育て支援—幼稚園での活動を中心に—、日本臨床心理士会 第一回子育て支援研修会、日本臨床心理士会子育て支援専門委員会(編)、22-24、2000
- 5) 藤後悦子：保育現場における心理相談員の役割、保育学研究39(2)、66-72、2001
- 6) 水谷孝子他：保育士の専門職性を支える条件Ⅱ、全国保育士養成協議会第44回研究大会研究発表論文集、108-109、2005